1. 教員および授業の概要

①教員名：井上 治（INOUE Osamu）

②担当科目

・博士前期課程：モンゴル語特別演習I・II、北東アジア超域研究総論、北東アジア専門講義５（北東アジア民族関係）、北東アジア研究指導I～IV

・博士後期課程：北東アジア超域研究指導I・II、特別研究活動

③教員のプロフィール

・早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程史学（東洋史）専攻 満期退学

・博士（文学）（早稲田大学）

・専門：モンゴル史、北東アジア文化史、北東アジア民族関係史、北東アジア超域研究

④所属学協会

日本歴史学協会、国際モンゴル学連合、日本モンゴル学会、内陸アジア史学会など

⑤研究領域や関心をもっているテーマ

・16 世紀のモンゴルを中心とした地域関係史

・16 世紀から 19 世紀までのモンゴル語で書かれた歴史書の文献学的分析

・13 世紀から 18 世紀までのモンゴル語出土文献の解読

・北東アジア地域における自然資源の伝統的利用法とその現状：白樺樹皮文化の研究

・朝鮮王朝で作られた北東アジア諸言語の教科書に関する研究

・モンゴルの民間に保存されているモンゴル語古籍の研究

・モンゴルの古絵図の研究

・仏教徒モンゴル人とムスリム・カザフ人との共生関係

・モンゴル語訳チベット語史書の研究

・外国人によるモンゴル探検資料の研究

・アフガニスタンのモゴール語の研究

・日本に残る蒙古襲来伝承地の探訪・研究：石見十八砦など

・石見神楽に残る蒙古襲来の影響調査：「風宮」の復活

⑥研究指導方針

院生の研究テーマや分析手法に関する希望を聞いた上で、ミクロ・マクロを問わず現代北東アジア地域に広く存在する何らかの域を超えて生起する超域的問題を歴史的にとらえ、社会構造・文化・生活方法の変遷過程を把握した上で、さらにそれを現代の社会問題に結びつけるよう指導する。北東アジア諸言語で書かれた文献資料や原典史料の厳密な解釈とフィールドワークの実施を重視する。

⑦指導可能な研究テーマ（あるいは過去（現在）に指導した研究テーマ）

・中国内モンゴルにおける族際婚姻による民族意識の再構成に関する研究
・北東アジアのタタール人ディアスポラ社会の構成と変遷に関する研究
・中国東北地方における生活環境の変化による伝統文化の存在意義に関する研究
・中国東北地方の少数民族のアイデンティティーに関する研究
・ポスト社会主義時代のモンゴルにおける家族の変容に関する研究
・ウイグル民族文化の観光への活用に関する研究
・現代内モンゴルの宗教（シャマニズム、仏教）に関する研究
・戦前・戦中在日タタール人ディアスポラの教育活動に関する研究
・現代内モンゴルにおけるモンゴル語教育に関する研究

2. 研究業績リスト

①主要な著書

(1) （共訳注）『アルタン＝ハーン伝訳注』（風間書房、1998）
(2) （共編）*Catalogue of the Mongolian Manuscripts and Xylographs in the St.Petersburg State University Library*.（Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa、1999）
(3) （共編）*Index to the Catalogue of the Mongolian Manuscripts and Xylographs in the St.Petersburg State University Library*.（Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies、2000）
(4) （共編） *Catalogue of the Mongolian Manuscripts and Xylographs in the St.Petersburg State University Library*（索引合訂本）.（Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies、2001）
(5) 『ホトクタイ=セチェン=ホンタイジの研究』（風間書房、2002）
(6) （共編） *"Explanation of the Knowable" by 'Phags-pa bla-ma Blo-gros rgyal-mtshan (1235-1280).* （Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa、2006）
(7) （共編著） 『ハラホト出土モンゴル文書の研究』（雄山閣、2008）
(8) （共編） *Sinǰiang-un ili-yin qasaγ ündüsüten-ü öbertegen ǰasaqu ǰéü-yin ögeled mongγulčud-un qadaγalaǰu bayiγ_a mongγul qaγučin nom bičig-ün γarčaγ*.（新疆イリカザフ自治州ウールトモンゴル人所蔵モンゴル語古籍目録）（Beijing Dixin Yinshua、2009）
(9) （共著）『世界史史料〈4〉 東アジア・内陸アジア・東南アジア II—10-18 世紀』（岩波書店、2010）
(10) （共著）『モンゴル史研究：現状と展望』（明石書店、2011）．担当：「モンゴルにおける史書の受容と継承について—『白い歴史』と『蒙古源流』を事例に」(237-255)
(11) （共著）『北・東北アジア地域交流史』（有斐閣、2012）．担当：「匈奴とモンゴルの交流圏」(143-166)
(12) （共編著）*In the Heart of Mongolia: 100th Anniversary of W. Kotwicz's Expedition to Mongolia in 1912*（Polish Academy of Arts and Sciences、2012）．担当：“Old maps showing

Erdene Zuu Monastery from the private archive of Prof. W. Kotwicz" (207-244)

(13) （共著）*A window onto the other : contributions on the study of the Mongolian, Turkic and Manchu-Tungusic peoples, languages and cultures, dedicated to Jerzy Tulisow on the occasion of His seventieth birthday*（Wydzał orientalistyczny Uniwersytetu Warszaskiego、2014）．担当："Incence Offering Text "Sang" and Mountain Worship of the Mongols. (130-145)

(14) （共著）『北東アジアの地域交流 : 古代から現代、そして未来へ』（国際書院、2015）．担当 :「モンゴルから見た北東アジア接壌地域」(121-155)

(15) （共著）*Монголын газрын зураг, газрын нэр судлал*（モンゴルの地図、地名の研究）（ШУА- Түүх, археологийн хүрээлэн、2015）．担当："Consideration on 清代乾隆期科布多疆域図 Shindai Kenryuu-ki Kobudo Kyouiki-zu (The Frontier-Area Map of Hovd in Qianlong Era of Qing Dynasty)"（80-99)

(16) （共著）『中央ユーラシア史研究入門』（山川出版社、2018）．担当 :「元朝北遷からリグデン・ハーンまで」(143-151)

(17) （共著〔刊行予定〕）『東北アジアにおける人の移動と共生』（東北アジア研究センター叢書）（東北大学東北アジア研究センター、2020）．担当 :「地方文書に見る清末モンゴル西部のカザフ人」

②主要な論文

(1) 「『ツァガーン・トゥーフ』の写本評価について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊18(1991):71-83.

(2) 「『チャガン・テウケ』の２つの系統」『東洋学報』73/3・4(1992):366-343.

(3) 「ホタクタイ＝セチェン＝ホンタイジの活動と政治的立場」『史滴』15(1994):31-46.

(4) 「『少保鑑川王公督府奏議』に見えるアルタンと仏教」『東洋學報』80(1998):01-025.

(5) 「アルタンとソナムギャンツォのチャブチャール会見とその意義」『アジア・アフリカ言語文化研究』59(2000):89-138.

(6) 「日本のモンゴル語戦時プロパガンダ誌とその周辺」『アジア遊学』54(2003):99-108.

(7) 「ホトクタイ=セチェン=ホンタイジ伝gegen toliの基礎的研究」『蒙古史研究』7(2004):257-291.

(8) （共編）「オブス=アイマグ出土モンゴル語白樺樹皮折本の研究」『早稲田大学モンゴル研究所紀要』1(2004):14-49.

(9) 「『チャガン=テウケ』"古本系"写本の問題についてーガンダン本と内モンゴル社会科学院蔵本の比較研究ー」*QUAESTIONES MONGOLORUM DISPUTATAE* 2(2006):269-292.

(10) 「19～20世紀前半のオルドスにおける外来文化要素の受容過程に関する一考察」『北東アジア研究』別冊1(2008):227-277.

(11) 「北東アジアの白樺樹皮文化—環境・社会・伝統・歴史からの北東アジア学—」『北東アジア研究』22(2012):81-106頁.

(12) 「焚香儀礼文に見るモンゴル人の山岳崇拝」『南道文化研究』23(2012): 185-228.

(13) "Excavated Mongolian Materials of the Seventeenth Century" *Transactions of the*

International Conference of Eastern Studies 56(2012): 66-79.
(14) “Materials Related to Mongolian Maps and Map Studies Kept at Prof. W. Kotwicz’s Private Archive in Cracow.” *Rocznik Orientalistyczny* 67-1(2014): 116-150.
(15) 「「モンゴル年代記」の成立とその後代への展開の研究」『北東アジア研究』別冊3(2017):21-29.
(16) 「ブリヤート人歴史家の歴史記述：モンゴルとロシアの描写を中心に」『北東アジア研究』29(2018):183-203.

3. 学生に対するメッセージ

もともとは、史料にもとづくシンプルなモンゴル史の研究を志していましたが、モンゴルに留学したことをきっかけに、モンゴル語で書かれた史料そのものに強く心を惹かれ、その研究に専心しました。また、その史料を作り出した人と時代の研究へ研究の範囲を広めて学位を取得しました。ここまでに築いた自分の研究の基本は、史料とそれに関わる時代と人について問うことにあり、史料と時代・人のあいだを往復しつつ研究を展開してきたと思います。ところが、島根県立大学で教鞭を執るようになってから、本学の先達たちから、史料そのものに関する研究は研究ではないと断ぜられたり、国際関係あるいは地域研究の領域に研究を修正するよう求められました。これに真面目に対応するため、史料のテキスト・データベース構築に走ったり、頻繁に現地調査に出かけたり、人類学や社会学の方向性を研究に取り入れたり、これまで深くは研究上の関わりを持たなかった朝鮮に手を伸ばしたり、島根と北東アジアの歴史的・現代的関係を掘り起こそうとしたりなどしました。このような「彷徨い」によって研究が散漫になったと深く反省するかたわら、研究の幅を広げる良い経験であったと思うようにしてきました。しかし、先達たちのそのような求めに応じて作り上げてきた研究が、仕舞いには無用なものと評価されたり、地域研究を脱してグローバル・ヒストリーに向かうよう求められたことをきっかけに、本学着任以来の研究に対する姿勢を改め、自分の本来の研究の在り方に立ち戻ることにしました。

このようなわたしですが、今日まで複数の大学院生を指導し、博士後期課程を修了させた者全員が大学の教員や研究機関の研究員となりました。わたしの指導を受けた大学院生の誰もが、わたしの厳格な指導に悩んだそうです。しかしわたしは、本学にいた先達のように、当人が志した研究を抜本的に変更するよう申し渡したことは一度もありません。わたしが少しでも関わることができる分野（1.の⑤と⑦を参照してください）の研究を志すのであれば、それを最後まで支援し指導する考えは今も変わりません。わたし自身が経験した上のような「彷徨い」を、わたしみずからが大学院生に強いることは決してありません。

わたしが厳格な指導に訴えてきたのは、大学院生が自分自身で研究の理論的枠組みと方法を攻究しない、手を尽くして資料と先行研究を獲得しない、それらを獲得しても読み込まない、議論を論理的に進めない、自説に不利な証拠をもみ消す、情報提供者・研究協力者への配慮が見られない、そして同じ誤りを何度も繰り返す、そしてそれができない責任を指導教員に転嫁するなど、研究者（の卵）としてふさわしくない事柄に及んだ場合です。

このようなことを厳しく指導することは、わたしが経験した研究への理不尽な干渉では決してないと思います。

本学大学院を志望する場合、指導を希望する教員と研究テーマについて事前に相談して指導の確約を得ておくことと、入学するや否やそのテーマをむやみに変更することは避けるようお願いします。わたしが指導できないテーマを持つ大学院生ははじめから受け入れませんし、指導を引き受けてから指導できないテーマに変更されるのは迷惑なことです。